

---

# 東西南北物語

karon

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東西南北物語

### 【Nコード】

N1073Z

### 【作者名】

karon

### 【あらすじ】

四つの街の境界線のある十字路。その角一つ一つに四つの高校があった。書類上はそれぞれ別の街。一つの街に一つの高校。

その高校は何故か怪奇現象が頻発する。そんな高校生活物語。

とある十字路にて（前書き）

更新遅いかもしれませんがよろしく。

## とある十字路にて

その十字路にはそれぞれ四つの高校があった。

東に東村高校。西に西部高校。南に南十字星高校。北に北斗女学院。何故こんな隣接した場所に四つも高校があるのか、それは、この場所が、四つの地区のちょうど境界線に立っているから。

十字路がちょうど境界線。その向こうは別の地区。だから四つの地区に四つずつ高校がある。それだけの話だった。

お役所仕事とはそんなもんである。

しかし、すぐ隣同士に高校がある以上、生徒の交流や生徒会同士の付き合いも密接にならざるを得ない。

それは、そんな学園の物語。

その学園では、怪奇現象が時々起きる。

あまりに頻繁に起きるので、春に新入生の悲鳴が聞こえるようになったら、ああ、もうそんな季節か、と誰もが呟く。春の風物詩。

## 東村高校生徒会

諸星かほるは新入学早々生徒会から呼び出しを食らった。

中学生時代はやんちゃで鳴らした彼だが、今のところおとなしくしていた。

生徒会室には、すでに先客が並んでいる。

生徒会の椅子に、いかにも真面目そうな眼鏡の生徒会長。

そして、その前に、いかにも風紀違反の見本帳といった連中が雁首並べている。

かほるは、茶髪をばさばさにきっただけと言う髪形をした男の横に立った。

その横は、いかにも不精で髪を伸ばしましたという中肉中背の口ン毛だ。

その顔は細いのだろうけれどひたすら長い前髪にさえぎられて、その目が一重なのか二重なのかもわからないという有様だ。

そして、横の残薔薇は、黙って立っていればいい男なのだろう。その無造作にはさみを入れすぎた髪形も、ニューカットといっても通じそうな、すでに改造が入った学ランも愛嬌だ。

それに引き換え、自分のまともすぎる格好を見て、かほるは違和感を覚えた。

自分は征服を改造していないし、髪形も、野暮つたいが至って普通だ。

それが何で、呼び出しを食らったのだろうか。

「全員そろいましたね」

生徒会長は黒ぶち眼鏡の縁を持ち上げ、手にしていたリストを机に置いた。

「本日より、来期生徒会役員候補の選考会を行います」

その場にいた全員がずっこけた。

「本日より、来期生徒会任命式までの期間がタイムリミットです。

その間に、生徒会役員を選ばせてもらいますのであしからず」

こけていた床から立ち上がりながらかほるが尋ねる。

「選考会って何をするんですか」

「それは内緒です」

生徒会長はニタリと笑った。

## 他の学校の生徒会

ざんばらは諸牙狼、不精ロンゲは五十嵐博次といった。

なんとクラスメイトだった。

面倒で、クラスの人間の顔をよく見ていなかったのだ。

五十嵐はともかく、諸牙は名前が近いのですぐ前の席に坐っていた。

今のところ、選考会の候補選びの古い落しらしきものは行われていない。

クラブ活動も今のところしていないので先輩の知り合いもいない。だからこれが恒例行事なのかもわからない。

ただ、なんとなく三人でつるむようになった。

いかにも不良といった風貌の狼はクラスでも浮いた存在だったが、それとつるむようになってかほると博次も巻き添えで遠巻きにされるようになった。

他の選考対象とはさして話をしたこともなく。このまま何もかも忘れられて平穏な高校生活を送れないかと、かほるは考えていた。

放課後、文房具店で買い物を買わせてふと背後を振り返ると、小学生のように小柄な少女が立っていた。

まん丸の顔にツインテールの少女が小学生ではないのは、北斗女学院の制服。紺に紅いラインのセーラー服姿だったので同年輩とわかったのだ。

少女はかほるを見て戸惑ったような顔をした。しかし、同じように買い物をしていた五十嵐が、少女に駆け寄った。

「博次知り合いか？」

学ラン姿の博次は、少女と何事か話しをしたあと、振り返った。

「単なる幼馴染」

この界限は文房具屋が多い、そして次に多いのが軽食を出す店だ。

おにぎり、ピザ、ハンバーガー、クレープなどなど、多彩な顔ぶれはやはり土地柄というものだろうか。

ちなみに西部高校は、チエックのブレザーだ。

とはいえ近いので、学校の垣根を越えて友人関係を気付く連中も多い。だから博次と北斗の生徒の交友関係もありふれたものだが。

彼氏彼女には見えない、なら博次の言うと折り単なる幼馴染なのだろうか。そこまで考えてかほるは髪を引きむしる。

まるででばがめじゃないか、別に博次に彼女がいようがいるまいが関係ない。

博次は数分立ち話をしてすぐに離れた。

少女は、背後にいた長い髪の少女二人のもとに駆けて行った。

そのうちの一人に既惓感があった。

「何でも、あいつも生徒会役員選考に入ったそうだ」

博次がそう言った。

「どうやら東村だけじゃない。この四つの高校すべてが、選考会という形で生徒会役員を決めているらしい。

博次はさも呆れたという気持ちを隠さないうそ言った。

「あのさ、右側の女の子どっかで見たことなかった？」

「名前も聞いたよ、火乃宮一実さんと、諸牙葉月さんだと」

その名前に唐突にさっきの感覚の理由を理解する。

狼に似ていたのだ。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1073z/>

---

東西南北物語

2011年12月11日22時54分発行